

研究

『幼稚園』の原著者

をさなごのその

ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 4

ベルタの波乱の後半生(続)

ディーター・レドナック(史学博士)



翻訳／ベルガー有希子(公立幼稚園教諭)
解説・写真提供／大戸美也子(幼児教育史研究者)

1 孤立するロンゲ夫妻

ベルタとヨハネス・ロンゲは、ロンドンのハムステッド地区に落ち着いた。その地で、ロンゲは十二人の小さな布教グループをつくり、ベルタという協力者も得て、新天地ロンドンから新しい教義を全世界に広めようと野心を強めた。会員たちは、いずれも「イギリスの宗教改革の先駆者」という自負を持ち、ベルタもまた彼の期待に応えようと献身的に支えた。しかし、彼らの努力はあまり報われなかった。ロンドンでの布教活動が軌道に乗らない上に、ハンブルグの仲間との関係も悪くなっていった。

当初二人は、ロンドンからハンブルグの大学経営を指揮することができると思っていたので、ハンブルグにいる友人に、たびたびアドバイスなどを書き送っていた。ところが、ベルタの友人にとってベルタは大学設立と同時に理由も告げずハンブルグからロンドンへ逃避行した人物である。大学運営に対する忠告など、かえってベルタの思い上がった高慢な態度であると受け取られ、拒絶された。ベルタの一番の親友であるエミリエ・ブステンフェルドさえも、一緒に問題解決に当たれないことに親友関係の危機を感じていた。

一八五〇年、ソーシャル協会の女性協会員がやつの思いで設立にこぎつけた大学であるが、その運営は

長くは続かなかつた。一八五二年春には、閉校しなければならなくなつたのである。その理由の一つとして、運営担当の女性陣のモラルに反する行動に、ハンブルグ市民が反発したことがある。実は、ベルタだけではなくエミリエ・ブステンフェルドも離婚の危機を迎えていたのだ。エミリエは、結婚生活は破たんしているけれども、表向き、結婚生活を続けていると公言していた。ベルタの例は、特例ではなかつたのである。当時、女性の自由や幸福を訴えるドイツカトリック教を支持するのは一部の教養のある女性に限られており、一般の人たちにとっては、彼女たちの行動はスキヤンダル以外の何物でもなかつたのである。

ベルタとヨハネス・ロンゲは一八五一年八月五日にロンドンで結婚する。同年九月には幼稚園を設立し、翌十月に長女マリーを出産した。ところが、ベルタの産後の肥立ちが悪く、ハンブルグにいる妹マルガレーテに助けを求め、ロンドンへ来て家事と幼稚園の手伝いを頼むことになつた。マルガレーテは、もともと身体が弱く、ハンブルグの大学入学の際も兄ハインリッ

ヒ・アドルフは世話係を付けることをベルタに約束させたほどであつたが、この時は産後のベルタの健康を配慮してハインリッヒは快く承諾したのだつた。もしこの時、兄が、ロンドンで十八歳のマルガレーテとカール・シュルツとが出会うことを予想できていたら、そう簡単には承諾しなかつたであらう。

一方、マルガレーテ本人は、大学で学んだことを実際に活かせる機会を楽しみにしていた。彼女は、講義のレジュメをフレーベルに送つたところ、「自分のものより優れている」と評価されたほど、フレーベルお墨付きの優秀な生徒だつたのである。

このころ、新郎ヨハネス・ロンゲはまだ仕事がなかつたので、一八四八年に亡くなつたベルタの父親の遺産の利子を唯一の収入源として生計を立てていた。実は、「杖のマイヤー氏」の遺言では、遺産は死後十年後に譲渡するようにとあつた。この時期、ベルタは経済的に苦しかつたため、弟とハンブルグにいる元夫トウン氏に支援を求め、本来ならば一八五八年まで据え置かれるはずの遺産の前倒し支払いを願つた。弟とト

ラウン氏は、遺産の利子の送金はもとより、病気や出産のたびに多額の援助をするなど、ベルタには好意的であった。しかし、離婚後もベルタに想いを寄せ続けたトラウン氏にもどうすることのできない難問題があった。ハンブルグの法律では、既婚女性の場合、遺産を相続する際には夫の署名を必要とされ、ロンドンのハンブルグ領事館に婚姻関係の証明をしなければならなかったのである。しかし、ベルタは罪ある離婚をしており、同じ権利において他の人と結婚することは許されなかった。ベルタはこの事情を熟知しており、ロンドンの役所には、結婚したにもかかわらず「独身」と登録してきた。このため、遺産の前払いは、実際は行われることはなかった。「杖のマイヤー氏」の全財産は、約八十万マルクに上り、七人の子ども一人当たりに対して、十萬マルクが割り当てられることになっていた。年間四%の利子で換算して、ベルタは月に約三五〇マルクの収入があった。因みに、当時のマイヤー家の工場で働く職人の年間平均給与が三五〇〜五〇〇マルクだったことからみて、利息だけでロンドンでの生活に困らない収入だったと言える。それにもかかわらず、

ベルタが前払いを求めたのは、ロンドンでの布教資金が必要だったのではないかと推測される。

2 幼稚園活動と「きょうごのど幼稚園」の原著執筆

ロンゲは、ロンドンで（宗教）革命家養成校を計画し、同時に小学校と幼稚園もつくった。ハンブルグを見本とする大学もその後続く予定であった。しかし、実現できたのは幼稚園だけである。

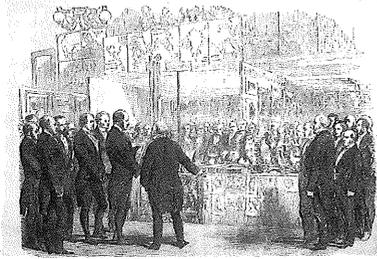
幼稚園は、一八五一年にハムステッドのポンド・ストリートに開設し、ベルタが園長を務めた。その後、ベルタの健康上の理由によりハムステッドからロンドンの市街地タビストック (Tavistock Square) に転居



▲ハムステッドのポンド・ストリート



▲タビストック移転後の幼稚園跡



▲アルバート殿下の新聞記事

し、一八五四年には自宅で幼稚園を再開した。この園は、毎週火曜日の午前中に公開し、併せて幼児の教育に関心を持つ保護者や家庭教師、教師を対象に、遊具の扱い方等の講習会も実施した。^{註1}

この年の夏、ロンドンでは、ヴィクトリア女王の夫君アルバート殿下が総裁を務める英国技芸協会の創立百周年事業として「教育博覧会」^{註2}が開催された。この博覧会の目的は、「教育への深い関心を喚起するために、内外のさまざまな教育機関で採用している多様な教材教具をできるだけ完全な形で収集し展示すること」であった。そこで、イギリス本土はもちろん、植民地の教育関係者およびヨーロッパや米国など十か国の教育関係者が一致協力して最新の教材教具を集め、展示した。また、会期中、教育や科学に関する著名な学者や教育者による講演会が、日曜日を除く連日の夕方、開催された。

ベルタは、ハンブルグの幼稚園教師ホフマンと共に、こ

の博覧会に幼稚園で使う遊具や子どもたちの作品を展示したのみならず、「幼児の指導（幼稚園）について」の講演も行ったのである。ヴィクトリア時代に、女性が公衆の前で講演することは前代未聞のことであったが、彼女の講演は、幼稚園という新教育を国内外の教育関係者に伝えるまたとないチャンスとなった。実際、イギリスの勅任視学官ミッチェルは、ベルタの幼稚園を視察し、その斬新な指導法に強く印象付けられ、教育委員会の年次報告書に「この指導法を適切に導入すれば、わが国の次世代は計り知れない恩恵を受けるであろう」と指摘している。また、教育博覧会にアメリカ合衆国を代表して参加していた教育長官バーナード博士も幼稚園に興味を示し、「このたびの教育博覧会に出品されたものの中で、最も興味深く、また教えられたものの一つは、フリーベル氏の考案による、廉価にして簡単な教材の見本であった」と述べている。^{註4}

こうした国内外の反響を受けて、幼稚園の遊具の扱い方の説明を書物にしてほしいとの要望と、講習会の開催を求める声が高まっていった。博覧会開催の翌年の一八五五年にロンゲ夫妻の共著として発行されたの

が「A Practical Guide to English Kinder Garten」である。この著書は当時の有力雑誌にも紹介され広く読まれたことが、一八五八年の第二版の序文に示されている。本書はその後世界各地で長く読まれた。まぢ

一八五七年以降、ロンゲ夫妻は活動の場をマンチェスターへ移し、「幼稚園教育法」の講演活動を活発に展開し、「幼稚園普及のためのマンチェスター委員会」を発足させ、同時に保育者養成クラスを始めている。しかし、ロンゲ夫妻の宗教的な考え方は、地域委員会の人々とは相容れず、養成クラスを仲間に譲ってマンチェスターを離れ、次いでイギリスを離れていくのであった。注6ベルタはマンチェスターに定住することにはなかったが、その後、この地は、イギリスの幼稚園普及運動の拠点として、イギリス全土に幼稚園理解を促す上で大きな貢献をしていくのであった。

3 離婚後もベルタへ注がれるトラウン氏の愛情

ベルタの幼稚園活動がいよいよ佳境に入ったその年の四月、長女アガーテが突然の病魔に冒され亡くなるという不幸が訪れた。父親であるトラウン氏は、息子

のハインリッヒを連れて急ぎロンドンに渡り、アガーテの最期を看取ることができた。皮肉なことに、このアガーテの急死をきっかけにヨハネス・ロンゲと知り合い、和解に至った。それまでトラウン氏は、離婚の原因は、ロンゲ氏の布教していたドイツカトリック教義にあると信じ、周りに主張してきた。つまり、ロンゲこそ、家庭崩壊をもたらした張本人としてきたのである。ところが、アガーテの葬儀にわが子のように死を悼んでいるロンゲ氏を見て、トラウン氏の心は動かされ、熱い握手を交わしたということである。その後、トラウン氏は、娘のベルタをハンブルグに連れ帰り、その代わりに息子のハインリッヒを母親ベルタの下に残した。その三年後の一八五七年には、ビルベルダーの邸宅で十一歳のフリードリッヒが亡くなるが、この時ベルタは周囲の反対を押して、ハンブルグへ子どもたちと共に渡った。

このように、ベルタの家族にはさまざまな問題が生じたものの、ハンブルグの実家との絆を断つことはなかった。それどころか、一年の数週間、ビルベルダー地区にある家族の家を定期的に訪れるようになって

いた。これは、トラウン氏の大きな愛情の証と思われる。ベルタとトラウン氏は離婚という形で離れてしまつたけれども、常に彼女を支え、ベルタが戻りたい時にはハンブルグの家に迎え入れた。

ビルベルダー滞在中に、ベルタは家族関係と同様に大学設立時の交友関係をも修復しようとして試みたが、自分が「不道德な女」と見なされていることに傷つき、結局、公の席に姿を現すことはなかつた。

4 再び故郷ドイツへ

一八六一年にプロイセン王ウィルヘルム一世は、政治亡命者に大赦を公布した。ロンゲは、もう長く英国で活動していたにもかかわらず、大赦が出ると、他の亡命者と共にドイツに帰国した。しかし、ハンブルグには戻らず、ロンゲの故郷ブレスラウに帰つた。シュレジアの首都であるこの土地で、二人は新たに婦人会と幼稚園、そして幼稚園教師のための養成校をつくろうとした。しかし、シュレジア政府の監視が厳しいことに気付いた二人は、間もなくフランクフルトに引越し、引き続き自分の使命を果たそうとする。しかし、

時はすでに遅過ぎた。間もなく、ベルタは肺の病いで一八六三年四月十八日にこの世を去つたのである。

葬儀では、マインツのドイツカトリック教伝道師であるヒエロニミ(Hieronym.)氏が弔辞を読んだ。彼は、女性の解放運動には反対であつたことから、あえてベルタの秀でた自己決定能力については触れていない。彼はベルタを理想的な教会員として、彼女のバイタリティーを次のように褒めたたえた。

「自然が与えることのできるすべてを、この友人は授けられていた。輝くように美しい容姿。頭脳明晰さ。病気の苦しみにも強く立ち向かう精神力と高貴な魂。眞実を眞つすぐに求める聖なる姿勢。周りの人のために温かく波打つ心。追放から母国に戻り、彼女は民衆の精神の解放という作業に、自分の力を注ぎ込もうとしていた。配偶者と共に、つくり上げたものに。」

フランクフルトでの葬儀の後、彼女の遺体はハンブルグに搬送され、ヤコビ教会に葬られた。そして、四十五年後の一九〇八年にハンブルグの上院議員となつたベルタの長男ハインリッヒ・トラウン博士は、オール



▲ベルタの墓



▲トラウン家の墓地全景

スドルファー墓地に立派な墓石群を購入し、そこに、父親と共に母親も埋葬した。こうして、両者は、まるで離婚という事実がなかったかのように、トラウンという姓を名乗ったまま、同じ墓の下に眠ることとなった。トラウン氏は、ベルタの死の十八年後に亡くなっている。

注

1 教育博覧会での講演や配布されたチラシに、公開保育の日や講習会開催について示している。

2 教育博覧会については、次の論文に詳述してある。

大戸美也子「一八五四年の教育博覧会の実態―開催動

機・内容及び波及効果」(埼玉純真女子短期大学「研究紀要」第五号、pp.37-60、1989.3)

3 Rev.Mitchell,Inspector Report, Minutes of Committee of Council of Education 1854-55, 1855, xiii

4 H.Barnard, Froebel's System of Infant Gardens, American Journal of Education, Vol.2, No.4, Sept.1856, pp.449-451

5 本書は、明治九年一月桑田親五訳で出版された『幼稚園』の原書である。岡田正章氏の調べで、邦訳は原書第四版(一八七七年)によることを明らかにしている。内容は、フレーベルの開発した恩物や手技の扱い方と唱歌や遊戯について記した幼稚園教育の手引書である。訳書は、わが国最初の幼稚園教育書であったことから、倉橋惣三によって「幼稚園史」として最も意義深い参考保育書の第一である(『幼稚園史』昭和五年)と評価されてきた。

また、大戸は、ロンドンのFroebel InstituteのArchivesに第十八版(一八九八年)が所蔵されていることを確認しており、本書が十九世紀後半全体をカバーするロングセラー書だったことがわかる。

6 Evelyn Lawrence(Ed.),Friedrich Froebel and English Education. London,Routledge & Kagan Paul, 1969, p.41